

益田ミリ

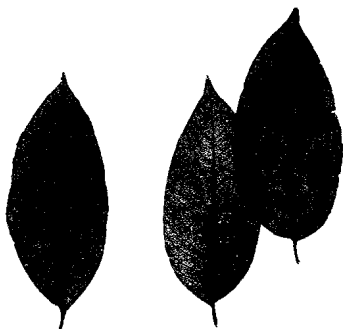
文庫書下ろし

お母さん

という女



  
知恵の森文庫



かあ おんな  
お母さんという女  
ますだ ミリ  
益田 ミリ

2004年12月15日 初版 1刷発行

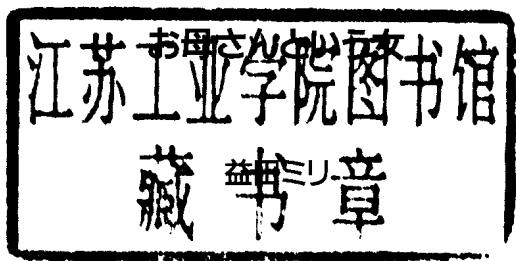
発行者—加藤寛一  
印刷所—豊国印刷  
製本所—榎本製本  
発行所—株式会社光文社

〒112-8011 東京都文京区音羽1-16-6  
電話 編集部(03)5395-8282  
販売部(03)5395-8114  
業務部(03)5395-8125  
振替 00160-3-115347

©miri MASUDA 2004

落丁本・乱丁本は業務部でお取替えいたします。  
ISBN4-334-78329-5 Printed in Japan

本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03-3401-2382)にご連絡ください。



光文社

この作品は知恵の森文庫のために書下ろされました。

## まえがき

あなたのお母さんはいくつあてはまりますか？

タレントの不幸な話にもらい泣きする。紅白歌合戦をまじめに楽しむ。みのもんたのすめる食材に目を光らせている。お尻がすっぽり隠れる上着を好む。写真を撮れば必ずななめに構える。朝の8時15分になるとNHKを見る。旅行先で買ったキーホルダーを鍵に付ける。小さいカバンの中には予備のビニールの手提げが入っている。黒豆ココアに反応した。寒い寒いと言いながら裸足だったりする。中村玉緒がテレビに出ているとつい見ってしまう。冬になると「風邪ひいてないか？」と電話をしてくる。牛乳にきな粉を入れて飲む。干支のせつけんを玄関に飾る。

ちなみにわたしのお母さんは、全部あてはまっています……。

愛を込めて、お母さんにまつわるエッセイとマンガを書きました。読み終えた後、あた  
たかい気持ちになっていただければいいなと思います。

益田ミリ

お母さんという女 ● 目次



母と写真

——アルバムを見る儀式

9

母のバッグ

——なにかのときのため

19

母のもつたいない

——「余熱で焼ける」

27

母とタッパー

——タッパー、タッパー、タッパー天国

35

母のアイデア

——ティッシュでも「いける」

45

母とさんま

——「8時からさんまちゃんあるから」

53

母とチラシ

——アートの世界でも大活躍

63



母と旅行

—— 10個ももらってどうすんの!?

69

母とお弁当

—— 「ちくわ」の出番

79

母のデイスブレイ

—— 植木鉢に人形

87

母とファッション

—— 猫と猫柄は別物

97

母と園芸

—— じゃが芋の葉

105

母とメール

—— 額に入れば相田みつを

113

母と介護

—— 「おばあちゃん、うちに引き取るから」

母とスーパーマーケット

—— 迷ったら買う女 131

母と運

—— 欲がある人には当たたらへん

母の趣味

—— 独自のカラオケ手帳 145

母の好物

—— うわぁー、くーどー 153

母のプレゼント

—— もらい上手 161

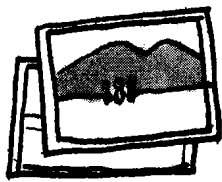
母の愛情

—— わたし、大丈夫かも 169

あとがき 176

## 母と写真

—— アルバムを見る儀式



写真の整理をしなくなったのはいつからだろう？

昔は写真好きでアルバムにマメに貼っていたわたしだが、今では輪ゴムでひとまとめにして箱に入れるだけである。想像するに、自分の写真をのちのち見るであろう子孫がいな  
いと思うと、きれいに保存することに気が入らないからではないだろうか。

このままいくと、わたしは子供をもたない人生になりそうである。  
そうなると、

「ほら、これが若かった頃のお母さんよ」

などと思えばいかす子供がいなわけである。自分自身が思い出を振り返るためだけの  
写真なら別にアルバムじゃなくて輪ゴムで……という感じになっちゃったのかもしれない。  
しかし、うちの母は見せる子孫がいるせいかアルバムの整理が大好きである。つてゆう  
かこれはもう性格なんだろうけど、アルバムにマジックでタイトルと日付を書いてきちん  
としまっている。

話は変わるが、現在わたしは親元を離れて東京でひとり暮らしをしている。もうすぐ10年になるので東京ライフにもすっかり慣れているわけである。にもかかわらず、わたしはしょっちゅう実家の大阪に里帰りしている。まわりの友達が「実家は盆と正月くらい」というのに対して、少なくとも年に6〜7回は帰っている。新幹線で往復すれば1回につき2万5千円近く。しかも別にこれといった用事があるわけではないのに、時間があればちよくちよく帰っているわたし……。自分の老後に向けての貯金もしなければならぬ35歳の独身女が、そんな大切なお金を使ってまでなぜ実家に帰りまくっているのかというと、親が喜ぶからである。父も嬉しそうだが、表現が素直な母はいつも大はしゃぎである。わたしの顔を見るくらいでこんなに喜んでくれる人間がいるうちは、やっぱり期待にこたえねばならんのではないか？ そう思うと、わたしは年に何回も実家に顔を出すのである。

こんなふうだから実家ではわたしはもっぱら母と一緒に行動している。

帰ったその夜に必ずあるのが、母の写真を見させていただく写真タイムである。父が、「わし、もう寝るわ」

と自分の部屋に行くと、母は待つてましたとばかりに、

「写真見る？」

とわたしに聞いてくるのだ。

お茶とお菓子テーブルに用意し、母の説明付きでアルバムを見る儀式のようなひとときである。

母の写真、すなわち、おばちゃんたちの写真には大きくふたつの特徴があるように思う。その一つが「悪ふざけをしない」ということだ。若い子たちがわざと変な顔をして写真を撮るような考え方は、彼女たちにはまずない。やってピース、もしくはダブルピースである。ほどよくにこやかに笑い、体は少しでも痩せて見えるように斜め構え。数人で写っている場合はみんなが斜めになっているせい、それはまるでドミノのピンのように。一番最初のおばちゃんを突けばバタバタと倒れていきそうである。

さらにもうひとつの特徴は、外で写した写真は風景がメインということ。

もちろん、風景がメインなのは別にいいのである。ただ「人物も一緒に入れたい」というおばちゃん魂のせいで、風景の中にもものすごく小さく人物が入っていたりするのである。

「さあ、みんな撮るわよー」

と言いながら、あの橋も入れたい、あの山も、あの空も、などと、どんどんどんどん後ろにさがり、結局人物はミニチュアサイズ……。表情どころか、じっくり見ないとわたしなど誰が誰かわからないほどの構図になっているのだ。母いわく「着てる服でわかる」と

いうことである。

そんな母の写真を見ながら故郷の夜はふけていく。アルバムをページをめくるたびに母のガイドが入り、それをうんうんと聞いているときのわたしは、東京で1時間4千円の足裏マッサージをされているときよりもリラックスしている気がする。

こんなとき、わたしは母が少し羨ましい。年老いたときに、自分の写真をながながと見てくれる人がわたしにはいないかもしれないからだ。まあ、それはそれで仕方がないんだけど、わたしの隣で楽しそうにしている母を見ると多少のせつなさは湧いてくるのである。

